

## KM 調査票の再検査信頼性

多 田 治 夫

### 研 究 目 標

精神衛生上のスクリーニング・テストとして、われわれの大学ではKM調査票を使用してきた。その予測的妥当性については、既に報告したが（多田・下出，1966），そこで提起された問題の一つは，テスト実施から1年以上を経過して発病する場合には，テストプロフィールがほとんど異常を示さないという所見であった。

この予測性の低さには、さまざまな理由が想定され，したがって予測的妥当性を高めるためには数多くの試みが可能なのであるが，本稿ではKM調査票そのものに内在する要因として信頼性に焦点をあてて，予測性を高めるための試みへの橋渡しをしておきたいと思う。

### 研 究 手 続

被検者は，金沢大学教養部学生 184名（男子93名，女子91名）で，入学時に第1回目のテストを受け，第2回目は約1年後に（正確には11月10日後）受検している。ただし，実施条件としては，第1回目は入学直後のオリエンテーション期間中に約1,000名の新入生のグループで実施されており，これに対して第2回目は心理学の講義時間中に約100名ごとの集団で実施されたという相異がある。したがって，第1回目と第2回目との間には，たんに1年という時間経過があるだけではなく，実施条件の面でも差があるものといわねばならない。

検査結果は，後述のように，統計的に処理されたが，たんに尺度値について再検査信頼性を算出するだけでなく，項目水準でも，またプロフィール判定の段階についても，再検査結果についての吟味を加えることにした。

### 結 果 と 考 察

#### 1. 尺度値の再検査信頼性

KM調査票の12尺度の再検査結果は第1表に示した。尺度値の平均が第1回と第2回では，多少の差がみられるが，通覧して気付くのは，第2回が第1回に比べて検査態度としての防衛性が低くなっていることである。すなわち，妥当性尺度のLとKが低く，これと対応してHs以下の臨床尺度が，第2回ですべて多少とも高くなっている。

再検査信頼性をみると，大部分の尺度で0.6あるいはそれ以上の信頼度が出ているが，Pd尺度とMa尺度は0.4代の低い値を示した。しかし再検査までの時間間隔が1年であることを考えるならば，全体としてそれほど低い信頼度とはいえない。第1表の右端に

Schofield (1950) の再検査信頼度をあげたが、これは平均 2 ヶ月という時間間隔をおいたものであり、これにはほぼ匹敵した値であるところから、KM 調査票の再検査信頼性は MPI 原版のそれとはほぼ同程度と考えてよいと思われる。

第 1 表 第 1 回および第 2 回の検査における尺度平均得点と再検査信頼性 (n=184)

尺 度	第 1 回平均	第 2 回平均	信 頼 度	Schofield
L	4.5	3.5	.54	.81
F	0.6	0.7	.58*	.75
K	10.9	9.1	.66	.66
Hs	6.5	6.9	.70	.72
D	10.0	11.3	.69	.73
Hy	9.5	10.2	.61	.68
Pd	8.5	9.5	.40	.57
Pa	5.7	6.4	.59	.59
Pt	10.1	13.1	.68	.70
Sc	8.2	10.8	.60	.59
Ma	7.9	8.8	.49	.78
Si	10.7	11.4	.64	

\* 四分分割相関

## 2. 項目の再検査信頼性

KM 調査票の 150 項目のそれぞれにつき、第 1 回検査時の反応と第 2 回の反応との信頼性をしらべた。この際には信頼性の示標として次の公式を用いた。

$$\text{項目信頼度係数} = \frac{\text{2 回とも同じ反応をした被検者数}}{\text{全 被 検 者 数}} \times 100$$

第 2 表に例示した場合ならば、この項目（「仕事は何も手につかず、まわりのことが何  
が何だかわからなくなった時期がある」）の信頼度は  $(50+57) \div 182 \times 100 = 59$  となる。

第 2 表 項目に対する反応の例 (項目番号13)

	第 2 回 の 反 応		計
	○	×	
第 1 回	○	19	69
	×	57	113
計	106	76	182

第3表 項目の再検査信頼度（S）一覧

項 目	S	項 目	S	項 目	S	項 目	S	項 目	S
1	83	31	82	61	68	91	99	121	91
2	69	32	72	62	77	92	75	122	81
3	87	33	70	63	84	93	95	123	91
4	76	34	92	64	96	94	75	124	73
5	99	35	79	65	97	95	78	125	68
6	72	36	85	66	63	96	71	126	92
7	65	37	66	67	88	97	75	127	73
8	71	38	81	68	79	98	73	128	77
9	75	39	96	69	76	99	77	129	96
10	89	40	94	70	72	100	74	130	82
11	72	41	69	71	96	101	75	131	97
12	68	42	87	72	99	102	76	132	75
13	59	43	73	73	81	103	81	133	69
14	64	44	74	74	79	104	86	134	88
15	98	45	72	75	70	105	88	135	96
16	89	46	80	76	81	106	71	136	87
17	81	47	70	77	93	107	75	137	99
18	99	48	75	78	79	108	79	138	82
19	98	49	69	79	78	109	77	139	93
20	84	50	81	80	78	110	83	140	84
21	70	51	81	81	80	111	67	141	77
22	83	52	77	82	68	112	95	142	77
23	95	53	96	83	63	113	80	143	72
24	68	54	99	84	74	114	77	144	99
25	79	55	75	85	75	115	98	145	77
26	84	56	82	86	67	116	80	146	74
27	92	57	65	87	84	117	74	147	88
28	82	58	72	88	80	118	84	148	75
29	83	59	99	89	76	119	80	149	66
30	96	60	80	90	76	120	63	150	98

このようにして算出された項目信頼度を一覧すると（第3表），信頼度係数は最低59から最高99の範囲内にあり，150項目の平均値は81になる。換言すれば，平均して81%の被検者が，第1回と第2回を通じて同一項目に同じ反応を出したことになる。比較すべき資料を知らないで，この結果がMMPI一般の項目の信頼度と比べて高いのか低いのかは明らかではない。

上述の項目信頼度を尺度別に整理した結果が第4表に示してある。一見して明らかのように，尺度によってそれを構成する項目の信頼度に大きな差がみられる。とくに顕著なのはF尺度であって，この尺度を構成する22項目のうち20項目が90%以上の信頼度を示している。この尺度は，定義により，被検者母集団の5%以下が○（あるいは×）をつけるような項目によって構成されているので，第5表に例示したような非常に偏った反応分布を示す。したがって，項目特性として第1回と第2回にちがった反応を出にくい項目だといえよう。

### 3. プロファイルの再検査信頼性

KM調査票の結果は，項目や尺度によって判定されるのではなく，12尺度の結果をプロフィールに表示したのものにとづいて判定される。したがって，判定結果の信頼性をみるためには，何よりもまずプロフィールの安定性を検討する必要がある。

第1回の検査結果を示すプロフィールと第2回のプロフィールとを同じ用紙に記入してみる

第4表 尺度別の項目信頼度分布

尺度(項目数)	50—59	60—69	70—79	80—89	90—99	平 均
L (13)		1	6	4	2	81
F (22)				2	20	96
K (20)		5	14	1		73
Hs (20)		2	7	9	2	81
D (26)		4	13	8	1	77
Hy (27)		3	13	9	2	78
Pd (26)		3	12	8	3	79
Pa (26)		2	9	5	10	84
Pt (30)		7	11	10	2	76
Sc (39)	1	3	12	13	10	82
Ma (22)	1	4	14	3		74
Si (22)		5	12	5		75

第5表 項目に対する反応の例(項目番号18)

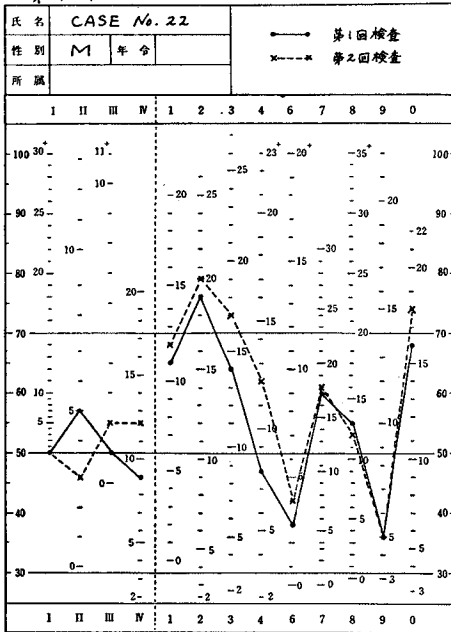
	第 2 回 の 反 応		計
	○	×	
第 1 回 { ○	0	0	0
回 { ×	2	182	184
計	2	182	184

と、その変化の有無が明らかに読みとれる。第1図は、第1回と第2回とであまり変化していないものの例であり、第2図はかなり大きな変化を示した例である。184名の全被検者について、このようなプロフィールを作成してみると、大部分の被検者では大きな変化がみられないのであるが、ごく一部の被検者においては、かなり大きな変化が認められる。

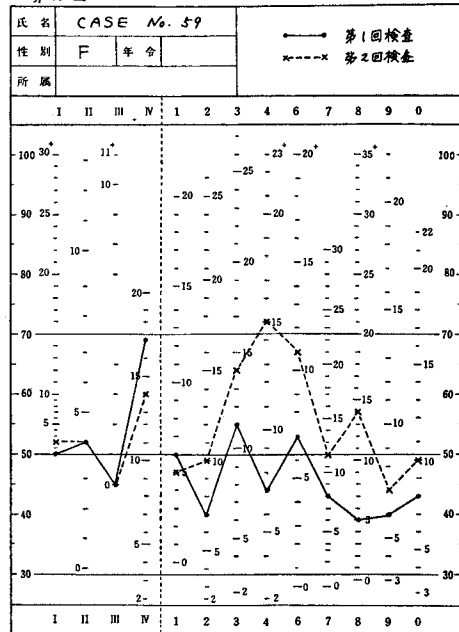
このようなプロフィール・パタンの変化は、判定結果に影響を及ぼすことはいうまでもないが、ある場合には尺度値にかなり大きな差があっても異常性の判定結果には影響しないことがあり、これと反対にわずかの差でも判定結果に大きな相異をもたらす場合もある。ここでは、異常性の判定結果においてどのような変化がみられたかをとりあげておく。

プロフィール判定は、MMPI原版について開発された判定ルールを改訂したわれわれのルールにしたがって行なわれた。この方式によれば(多田, 1964), 判定結果は「正常」「準正常」「異常」の三分法によって表示される。本研究の場合には、第1回のプロフィールと第2回のプロフィールについて、それ判定した結果、第6表のような結果をえた。第1回のプロフィールでは、第2回に比べて「正常」の判定がやや多く、「異常」の判定が少ない傾向がみられるが、全体としてはほぼ似た割合の判定結果といってよい。しかしながら、

第1回 KM プロフィール (A)



第2回 KM プロフィール (B)



第6表 第1回検査と第2回検査のプロフィール判定の一致度

		第 2 回 の プ ロ フ ィ ル			計
		正常	準正常	異常	
第1回	正 常	122	19	10	151
	準正常	11	5	6	22
	異 常	3	3	5	11
計		136	27	21	184

両回を通じて全く同じ判定結果をえたものは、184名中132名(72%)であり、残る52名(28%)は第1回と第2回では異なった判定を下されている。

第1回検査時と第2回検査時とで、被検者の精神健康に実質的な変化がみられる場合もかなりあらうことは推定できるが、今回の調べでは、そこまで探索を行っていない。したがって、検査法自体に起因するプロフィール変動がどの程度であるかは不明である。ここでは1年間の間隔をおいた場合に観察されたプロフィールの変化が、判定結果において28%の被検者にみられたという報告のみにとどめねばならない。

#### 引 用 文 献

- Schofield, W. (1950) Changes in responses to the Minnesota Multiphasic Inventory following certain therapies. Psychol. Monogr., 64, No.5  
 多田治夫 (1964) MMPI のスクリーニング・テストとしての妥当性 日本心理学会第27回大会抄録 P437  
 多田治夫・下出幸栄 (1966) KM 調査票の予測的妥当性 臨床心理学の進歩 (日本臨床心理学会編) 1966年版 P.43-48